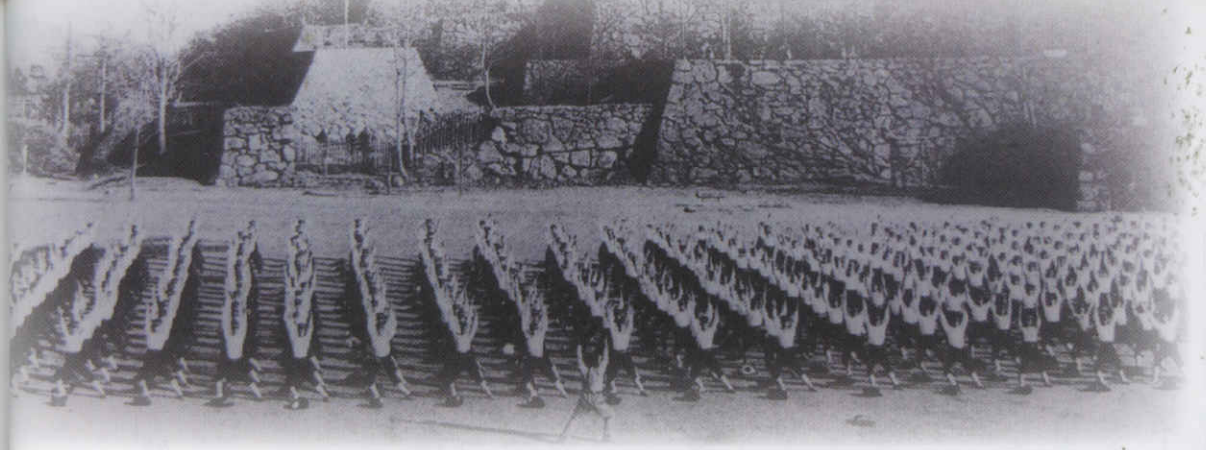
我ら"大円団"
オーエンダン
第133周年 甲府中学・甲府一高 同窓会
～未来にエールを～
県立甲府第一高等学校



甲府中学校校歌

一、我等は日本に生まれたり
神の御代より一系の
皇統戴く我国に
生れしことのうれしさよ
皇国の栄えは天地と
共に窮りなかるべし

二、大和島根に山めぐる
甲斐の国あり水清き
郷土の歴史顧みよ
我等の務め軽からず
見よや南に富士ヶ嶺は
皇国の鎮めと聳えたり

三、大海原の揺りやまぬ
波をも風をも凌ぎつつ
護れ皇国を諸共に
国民挙りて国のため
撓まず萎縮まず辟易がず
進むぞ大和ごころなる

甲府第一高等学校校歌

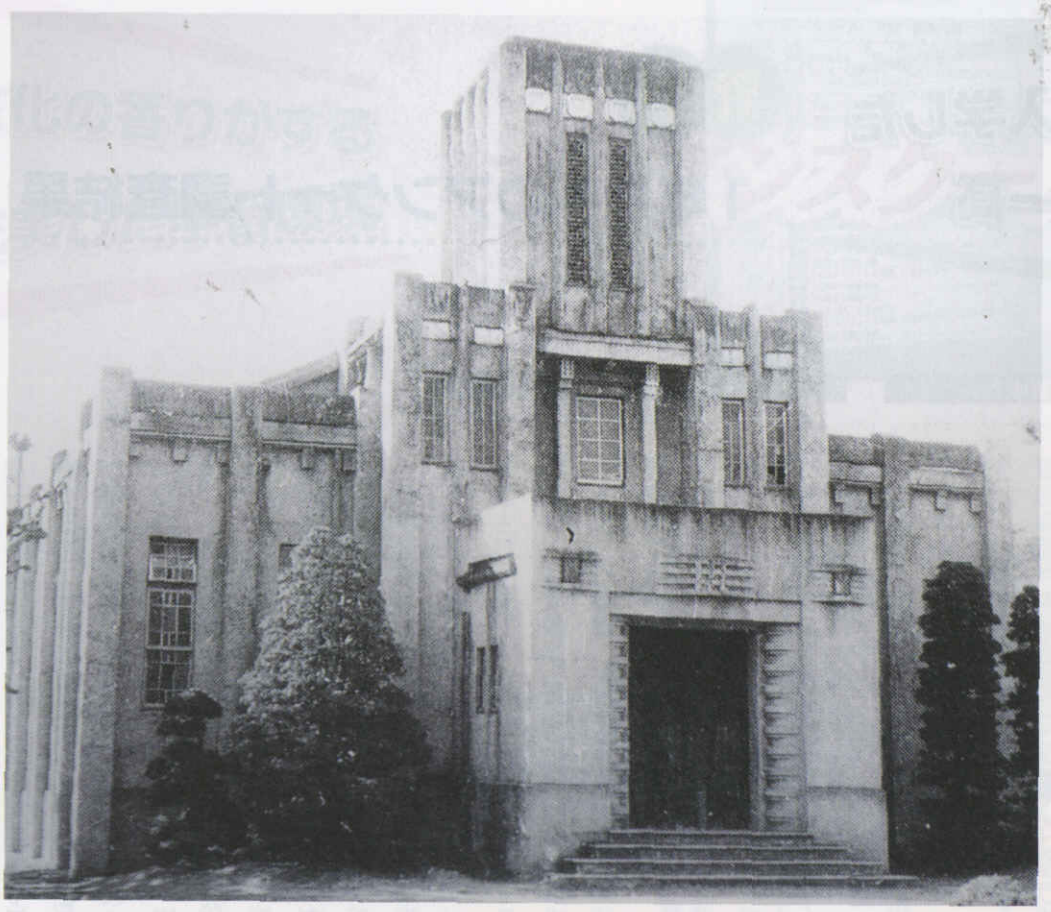
一、甲斐の国　み中に建ちて
古へゆ　雄心伝へ
新しき　世の鑑とし
勉めてむ　この学舎に

二、日に新た　また日に新た
弥高き　のぞみをもちて
真なる　理究め
励みなむ　若人我等

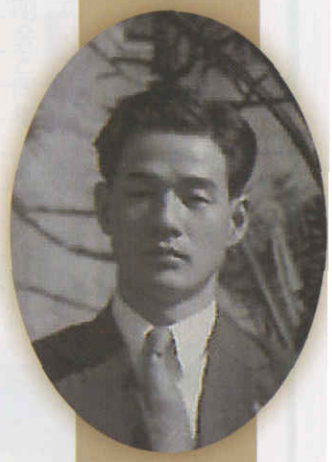
三、聳えたつ　芙蓉のたかね
清き哉　甲斐の山川
もろともに　玉と磨きて
贊くべし　天地の化育

特集 校歌に込めた思い

～上條馨氏と甲府一高～



甲府一高旧講堂



昭和二十三年十月二十二日、第六十八回目の創立記念日を翌日に控えたこの日、甲府一高講堂において大勢の人々が詰めかける中、「甲府第一高等学校校歌」のお披露目が行われた。歌うはソプラノ歌手の浅野千鶴子さん、ピアノ伴奏は安倍和子さん。

作曲は東京音楽学校（現・東京芸術大学）の小松清氏。そして作詞は当時、甲府一高で教鞭（きょうべん）をとられていた上條馨氏。甲府市美咲の現校舎の東、御崎神社に生まれ、その後神職も継がれた、まさしく応援歌にも歌われる「おみさきさんの神主」なのである。

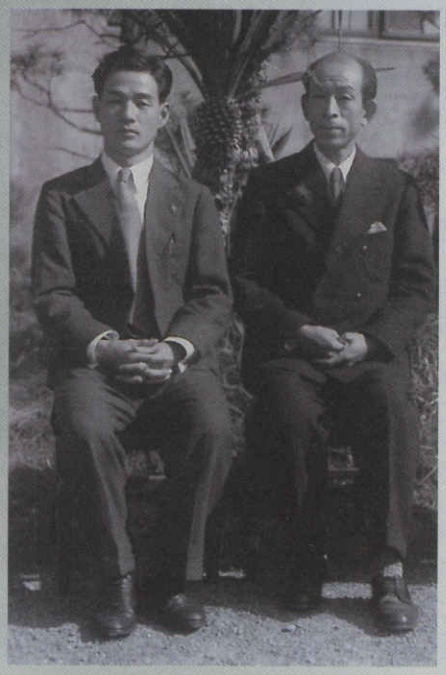
この発表会には、後に上條氏の妻となる小田（旧姓）和子さんも歌手の浅野千鶴子さん見たさに会場に駆けつけていた。上條氏と結婚する十二年も前のことで、当時はまだ面識もなかった。

校歌制定記念演奏会のようす

安倍和子さん（左）と、浅野千鶴子さん

この発表会で配られた楽譜や様子を伝える写真、上條氏の直筆の歌詞などが、上條氏が亡くなられて半世紀が過ぎた今も、妻の和子さんや上條氏の親族らの手元で大切に保管されている。

このたび、それらの資料に加え、妻の和子さん、実妹の清水登茂恵さんらへの取材も交えて、上條馨氏が甲府一高の校歌に作詞者として込めた思いを少しでも紹介できたらと思う。


上條馨氏（左）と、小松清氏

新しい我らの校歌を

「我等は生まれたり……」で始まる、甲府中学の校歌は、昭和三年に甲府中学同窓生の歌人・三井甲之氏の作詞、東京高等音楽学院（現国立音楽大学）・榊原直氏の作曲でつくられ、二十年もの間、力強く歌い継がれてきた。

三井甲之氏

そして甲府一高の校歌は、二十三年四月、学制改革により、それまでの甲府中学から「甲府第一高等学校」と名称が変更されたことに伴い、在校生らから「時代に即した新しい我らの校歌を」との機運が盛り上がり、新校歌制定への動きとなった。近藤兵庫校長（当時）が中心となり、在校生、卒業生、教職員を対象に歌詞を募集。俳人・飯田蛇笏氏を審査委員長に、寄せられた二十二編の中から審査した結果、上條氏の歌詞が選ばれた。

飯田蛇笏氏

「歌の生命」を求めて山へ

大正末期の御崎神社

上條氏は、大正十年三月に御崎神社の宮司・上條定久氏、多津さんの二男として生まれた。甲府中学から神宮皇學館（現・皇學館大学）へと進み、昭和二十一年から七年間、甲府一高で国語教師として教壇に立った。そして、幼いころに長男である兄・一雄氏を亡くしたことから、教師とともに御崎神社の宮司も務めた。また、『風塵抄』『甲州風物誌』『続甲州風物誌』といった歴史書籍等も執筆した。

上條氏は、昭和三十四年に発行したこの『甲州風物誌』の中で、校歌発表の際の挨拶文を掲載する形で作詞について綴っており、〝本校の卒業生として、また母校に奉職する私としまして、この光輝ある本校にふさわしい立派な校歌をつくりたい〟という熱い思いから作詞を決意。夏休みのほとんどを校歌制作に費やした。

そして〝自分の心を清く気高く、また雄々しく保たなければ、とうてい立派なものができようない〟と、「歌の生命」を求めて山に登った。

妻の和子さんは言う。「とても山が好きな人でした。楽して書くのではなく、自分の体を傷めて、試練を与えることで歌詞をつくりたかった、と私に話してくれました。その創作の場所として甲斐駒ケ岳などの山々を訪れたようです」

しかし、作詞の段階では、〝山の霊気にふれ、またそれを思いおこすことによって、私の精神を清浄に、雄々しいものに保ちつつ、歌にとりかかったのですが、なかなか詞がまとまらず……〟と、その苦労を記している。

妹の登茂恵さんも「兄は祝詞をあげ、身を清めて作詞に取り掛かりました。自室にしていた神社社殿の三畳間に一ヶ月近くも籠って歌詞と格闘していて、朝になると紙がいっぱい散らかっていました」と苦戦した様子を語る。

そして〝八月末の二十七日の夜、一度床について間もなく、次々に詞が浮かんでまいりまして……（中略）、一番、二番、三番と、次々に書きとめ……（中略）、それを毎日毎日何遍も読みなおし書きなおし〟という過程を繰り返し、

遂に歌詞は完成した。

ただ後に、妻の和子さんには「甲斐駒ケ岳に登って岩陰に座ってひと休みしたところで、すらすらと言葉が浮かんだ」と話していたという。それは、妻に対しては苦労を見せない、思いやり、優しさだったのかもしれない。

なお、歌詞の内容については次のように解説している。

一番　甲斐の国の中心に位している我が校は、その創立の昔から、雄壮剛健の気風をうけつたえて、今この新しい世に際会しては、この世を照し正すかがみともなるよう大いに奪励努力しよう。この栄ある学舎において

二番　学徳を日々に新たにすすめ……（中略）、高い理想と希望とをもって……（中略）、学術の審理を究め、大いに励んで行こう。我ら若人達よ

三番　おごそかに聳え立つ富士山や、清い甲斐の山や川の精をうけて、もろともに切磋琢磨し、天地自然のめぐみ、人間の本性をたすけ、のばしていこう

母、弟、妹と。後列左から、弟の加寿彦氏、妹のみつ江さんと登茂恵さん

歌詞に織り込まれた校是

上條氏の作った歌詞には、甲府一高の号鐘「日新鐘」という名称もそうであるように、中国の書『大学』よりその多くが引用され、「日に新たまた日に新た」「賛くべし天地の化育」と詠われる。

そしてさらには、第六代校長・大島正健先生の札幌農学校（現・北海道大学）時代の師であったクラーク博士の「青年よ大志を抱け」の言葉の意味も込められている。

ところで甲府一高の校歌には、校名が入っていない。しかしながら「甲斐の国　み中に建ちて　古へゆ　雄心つたへ」と校名がなくとも甲斐の国の中心に建つ伝統の学校「一高」を連想させるような歌詞となっており、歌詞の中に校是などを織り込んでいる。

『大学・中庸』（岩波文庫）

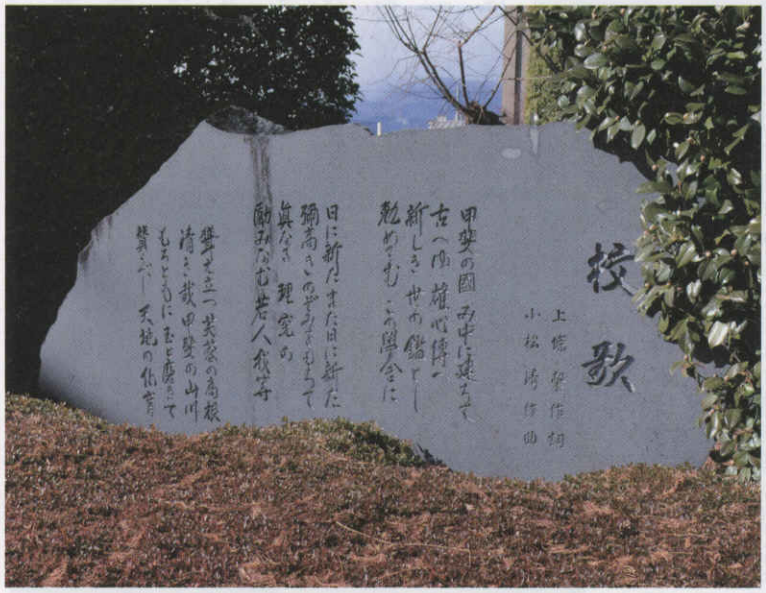
クラーク博士

山梨の旧制中学は、学制改革で高等学校へとその制度、名称が変更されたことに伴って、相次いで校歌を新たにした。しかしその実、学制改革後数年経った後のところが多く、改革とともに新校歌制定を行った甲府一高に習ったともいえよう。

一高に追随する形で新校歌制定を行った高校にも、校名

を詠わずに学校の環境や校訓などを用いて特色を出しているところがある。校歌に校名が入ってないのは、この時代の流行だったのかもしれない。

古くより甲府一高の学生は、古典の授業などで校歌の意味や校是を学習する。今の在校生も、校歌に対して「歴史、伝統を感じる」「曲の雰囲気と一高が合致している」などという印象を持っており、大変親しみを持っている。同窓生も「校歌、応援歌は何十年経っても自然と口から出てくるもの。特に校歌は心や体が熱くなる」と語る。校舎が新しくなった今も、校歌が刻まれた石碑は校内に残され、堂々とした存在感を放っている。



校舎正面横に設置されている、校歌が刻まれた石碑

結婚直後に急逝

上條氏は、甲府中学、甲府一高と勤務し、教員三年目の時、校歌作詞を手掛けた。その後、病により、一時教職を離れるも、体が回復した後、恩師の誘いにより、山梨学院大付属高校で第二の教員生活を送った。

和子さんと。結婚式の一コマ

妹・みつ江さんの長女の御宮参り後、社殿にて。両脇は上の妹・登茂恵さんの二人の娘。後列の左から、みつ江さんの夫、馨氏、登茂恵さんの夫

昭和三十五年五月に和子さんと結婚。しかし、その年の暮れ、不慮の事故に遭い、年が明けた正月三日、和子さんや甲府中学時代の同級生の医師らの見守る中、息を引き取った。僅か七か月の新婚生活で、愛娘の節子さんの生まれる二か月前のことだった。

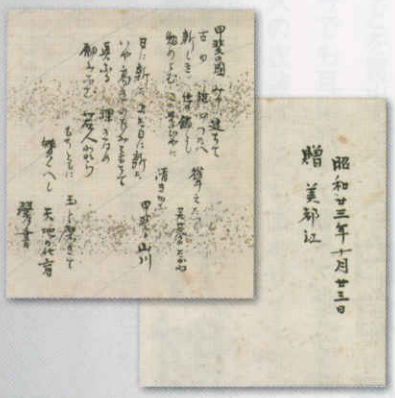
和子さんはこう話す。「一緒にいた時間があまりにも短かったので思い出も限られますが、私のことも親のこともとても大切にしてくれて、幸せでした。人を思いやる優しい心を持った人、ということが一番心に残っています。一高があらん限り、みなさんに歌ってもらえる

ことはとてもうれしいことです」

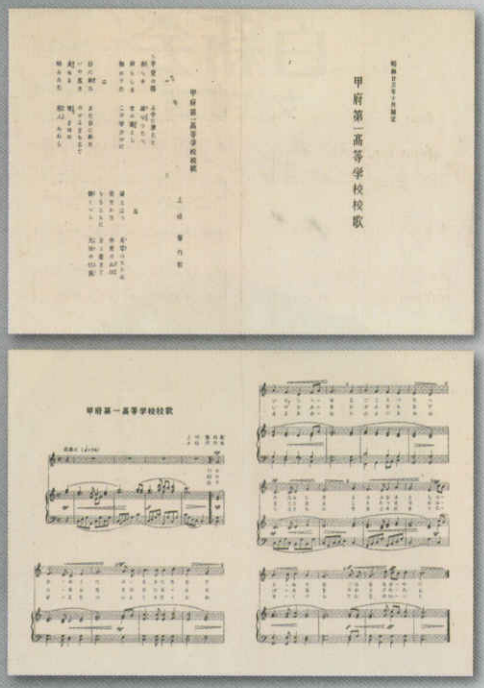
馨氏の死後は、弟の加寿彦氏が御崎神社の宮司を引き継ぐことになった。加寿彦氏は甲府一高の第一回卒業生で、大学卒業後、秋田県でガス会社に勤務していたが、馨氏の突然の悲報に際し、秋田から呼び戻された。

そして今は、馨氏の娘・節子さんと、神職を務める夫の晃さんが御崎神社を守り、「おみさきさんの神主」を引き継いでいる。

一、二番が書かれた色紙（表）



三番まで書かれた色紙。裏には、贈り先のみつ江さんの名を「美都江」と表記している



発表会で配られた楽譜

親族の手元に保管されている、上條氏の直筆の歌詞は、実妹で三女のみつ江さんにねだられて書いたものだという。一般的な色紙よりひと回り小さく、金粉が散りばめられた厚手の和紙に、歌詞とともに発表会翌日の創立記念日の日付が墨の筆書きで記されている。一、二番を書いたものと、三番までの歌詞を書いたものの二枚がある。

また、発表会で配られた楽譜には、「昭和廿三年十月制定　甲府第一高等学校校歌」との表題で、B四判の用紙に、歌詞とともに楽譜がガリ版刷りされている。

先人の努力

伝統という名で、山梨県の高校の雄として存続する甲府第一高等学校。しかし上條氏は、著書『甲州風物誌』の中で、〝名門とうたわれるようになったのは、単に歴史が古いというからではありません。そこにはわれらの先輩、諸先生の、たゆまざる努力のあとがつみかさなっているのであります〟と、歴史とともに、人が築き上げた「名門」であることを強調している。その思いは同窓生、教職員、在校生、すべての人の思いと同じにする。

上條氏は、校歌発表会での感想を、昭和二十六年に発刊した『風塵抄』の中でこう振り返っている。

〝恩師らに祝（ことほ）がれつつ新校歌発表の挨拶を無事に終えたり
「日に新たまた日に新た」と諸（もろ）聲に和して歌える我も一人〟

【参考、引用文献】『甲州風物誌』『続甲州風物誌』『風塵抄』（いずれも上條馨氏著）